

論文 / 著書情報
Article / Book Information

| | |
|-------------------|--|
| 題目(和文) | 新規学卒者の採用選考試験における職業興味検査法の分析と瞳孔径による検査法の開発及び評価に関する研究 |
| Title(English) | A Study on Analysis of Vocational Interest Assessment and Development and Evaluation of a Pupil Diameter-Based Method in Screening Process for New Graduates |
| 著者(和文) | 鈴木智之 |
| Author(English) | Tomoyuki Suzuki |
| 出典(和文) | 学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9560号, 授与年月日:2014年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:中山 実,西原 明法,前川 眞一,室田 眞男,林 直亨,青木 洋貴 |
| Citation(English) | Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9560号, Conferred date:2014/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,, |
| 学位種別(和文) | 博士論文 |
| Category(English) | Doctoral Thesis |
| 種別(和文) | 審査の要旨 |
| Type(English) | Exam Summary |

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

| 報告番号 | 甲第 | 号 | 学位申請者氏名 | 鈴木 智之 | | |
|-------------|-----|-------|---------|-------|-------|-----|
| 論文審査 審査員 | | 氏名 | 職名 | | 氏名 | 職名 |
| | 主査 | 中山 実 | 教授 | 審査員 | 室田 真男 | 教授 |
| | 審査員 | 西原 明法 | 教授 | | 林 直亨 | 教授 |
| | | 前川 眞一 | 教授 | | 青木 洋貴 | 准教授 |

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は「新規学卒者の採用選考試験における職業興味検査法の分析と瞳孔径による検査法の開発及び評価に関する研究」と題し、以下の8章より構成されている。

第1章「緒論」では、新規学卒者の採用選考試験において、面接等では就業希望者の職業興味を適切に把握できない問題点を取り上げるとともに、瞳孔の精神感覚反応を用いた職業興味検査の可能性を論じている。その上で、本論文の目的を、新規学卒者の採用選考試験において、構造化面接法と3件法による質問紙法の課題を明らかにするとともに、生体指標のうち瞳孔径を用いた職業興味検査法を開発し、信頼性及び妥当性を評価することであると述べ、各章での内容について概説している。

第2章「職業興味検査の内容と運用の評価法」では、構造化面接法、3件法による質問紙法、瞳孔検査法を評価する視点を述べている。内容の評価法については、信頼性と妥当性について論じている。さらに、運用の評価法については、時空間的な制約からの評価方法を検討している。

第3章「構造化面接法の評価」では、面接法で中心的な方法として知られている構造化面接法を取り上げ、信頼性と妥当性の評価結果について述べている。一次面接、二次面接、最終面接の計三次の面接員による評定値間の相関関係の変化から、面接員が変われば採否判定結果が異なることを述べている。さらに、採用面接評定値を要因として入職後3年目の行動評価平均値について、一元配置分散分析の結果から採用面接の評定が入職後3年目の人事評価に影響しないことを示している。

第4章「3件法による質問紙法の評価」では、質問紙法としてよく用いられる3件法の検査について、信頼性と妥当性の評価結果について述べている。採用選考試験に類似した特定の実験条件の場合、3件法による検査において、被験者全員の職業興味は本来の職業興味と逆転することを明らかにし、質問紙法にはバイアスがかかることを述べている。

第5章「瞳孔径による測定法の開発」では、瞳孔径を用いた職業興味検査の測定法の開発について述べている。職業名に関する文字列に対する瞳孔径について、職業興味の有無の2群間で相対瞳孔径の平均値を比較したところ、有意な差が得られたことから、職業名への興味を瞳孔径変化で評価できることを述べている。その上で、瞳孔径による測定法で、一時的な実験条件による影響を受けることなく、職業興味検査ができることを述べている。

第6章「瞳孔検査法の評価」では、瞳孔径で測定される職業興味の経年での安定性と、入職後3年目の人事成績との関連を述べている。自社業界の文字列に対する瞳孔径と入職後の行動評価との間には有意な相関関係が認められたことを示している。加えて、瞳孔径による2群間で入職後の行動評価の平均値を比較したところ、有意な差が見られたことを述べている。

第7章「評価運用における課題に関する考察」では、本論文で提案する瞳孔径による職業興味検査法の運用における問題点とその解決法を論じている。

第8章「結論」では、本研究で得られた成果および今後の課題を述べている。

以上を要するに、本研究は、新規学卒者の採用選考試験において、構造化面接法と3件法による質問紙法の課題を実証的に明らかにするとともに、瞳孔径による職業興味検査法を開発してその評価法の信頼性及び妥当性が高いことを示しており、工学上貢献するところが大きい。よって、本論文が博士(工学)の学位論文として十分価値あるものと認められる。